



森島 いずみ

森シホカ・絵

シロが死んだ日、雪がふっていた。
わたしは七歳で、シロは十四歳。わたしはまだ子どもなのに、シロはすっかり年をとっていた。

わたしが小学生になる少し前に、ママが仕事をさがしはじめた。ひとりっ子のわたしは、庭でかっていたシロを、家の中でかいたといった。遊び相手がほしかったからだ。雑種の番犬を家に入れることに、ママは反対した。もちろんパパも。

「シロのつきには、もっと小さな室内犬をかいましょう。そしたら、家の中がかってもいいわ」

でも、わたしは、シロをお風呂場につれていき、ありったけのシャンプーをつかって、シロの鼻の先からシッポの先まで、あわだらけにして洗い、それからオレンジの香り

のするリンスで念入りに仕上げをして、シロをふわふわのまっ白い犬に変えた。

そして、シロといっしょにこたつにはいって、みかんをむいて、半分ずつわけ合って食べた。

シロは、とてもおいしそうに、みかんを食べた。

おとなたちは、おこるよりもあきれてしまい、シロはその日から、室内犬になった。

シロはいつも、わたしのそばにいた。

宿題をしているときは、足もとでうづくまり、寝そべってマンガを読むときは、ぴったりとわきにくっついて昼寝をした。

ごはんを食べるあいだも、寝ているあいだも、シロはい